9 梅若塚

平安時代の中頃のお話です。京都の北白河というところに吉田少将惟房と花御前という夫婦がいました。二人の間には梅若丸という一人息子がいました。二人はこの梅若丸を愛情深く、そして大切に育てました。二人の深い愛情を受けながら、梅若丸は優しく、賢い子どもに育っていきました。

梅若丸が五歳のとき、父親の惟房が亡くなり、彼は比叡山（滋賀県）にある寺へ預けられました。母の花御前は、修行を終えて立派に成長した梅若丸との再会を楽しみに、毎日暮らしていました。梅若丸も、母の無事を祈りながら、修行に励んでいました。ところが、仲間との争いが原因で、梅若丸は、寺を出て行くことになりました。修行の途中で母の元へ帰るわけにもいかず、どうしたものかと考えていたところで、人買いの信夫藤太と出会います。藤太は梅若丸を売りはらおうと考え、うまくだまして彼を連れて奥州へと向かいました。

豊春の里（現・春日部市）のあたりまでやってきたところで、長旅の疲れからか梅若丸は重い病気にかかってしまいました。藤太はそれを見ると、梅若丸が足手まといになり、その場に残して立ち去っていきました。

重い病の床で梅若丸は、

「ひと目母に会いたい。小さいときに別れた母に……。」

と何度も何度も言い続けていました。

里の人々も梅若丸を必死に看病しましたが、病気はよくなりません。

病いに倒れてから数日後のことです。梅若丸は、

「母にひと目会いたいと願っていましたが、かなえられそうにありません。もし母が私を探してこの地に来ることがありましたら、梅若丸は最期まで母に会いたがっていた、母の無事を願っていたと、お伝えください。」と話し、

尋ねきて問わば答えよ都鳥
隅田河原の露と消えぬと

という歌を残して息をひきとりました。

里の人々は梅若丸をかわいそうに思い、近くを流れる隅田川のほとりになきがらを埋め、小さな塚を築き、ねんごろに葬りました。そして、里の人はこの塚を「梅若塚」と名づけ、供養を続けました。

修行に出てから母の元へ届いていた梅若丸からの便りが途絶え、しばらくたったある日のこと、母の花御前に、梅若丸が人買いにだまされて連れていかれたという話が伝わってきました。花御前はそれを聞くや梅若丸を探しに京をすぐに出発しました。そして、梅若丸の行方を尋ねてあちこち探し歩きました。船に乗ったと言われれば船に乗り、東に向かったと教えられれば、けわしい峠道を歩いて東に向かいました。しかし、梅若丸の行方はいっこうにわかりません。それでも母は、梅若丸に会いたい一心で、自分の足で探しまわりました。そして、豊春の里にたどり着きました。里では人々によって梅若丸の供養が行われていました。人々は梅若丸のことを語り合っては、彼のことを気の毒がっていました。花御前はその話を耳にして、もしやと思って話しかけました。

「今のお話されていた子どもというのは、『梅若丸』という子どものことではないでしょうか。」と必死で母は尋ねます。

「おっしゃるとおり、『梅若丸』という子どものことです。……もしや……。」

「はい、梅若丸の母でございます。」

「そうでしたか。お母さん……。彼を尋ねてはるばるこの豊春の里まで……。彼も『母に会いたい』と最期まで言い続けていましたよ。」

里の人の話を聞き、

「なんとかわいそうな梅若丸。人買いにだまされた上に重い病気にかかり、捨てられるように母にも会えずに短い一生を終えるとは。」

花御前はその場に泣きくずれました。

里の人々は梅若塚へ花御前を案内しました。

花御前は、塚にとりすがり、

「今までは、いつかきっと会えると思い、見も知らぬ東国まで下ってきました。それなのに、もう生きておらず、おまえが葬られているというこの塚だけを見ることになろうとは。梅若丸よ、おまえに会うことだけが母の生きる支えだったのに……。」

塚に向かって語りかけました。そして、梅若丸のために静かに念仏をとなえ始めました。しばらく念仏をとなえていると、どこからかそれにあわせて念仏をとなえる声が聞こえてきました。

「今の念仏の声は、確かに梅若丸の声です。この塚の中から聞こえたようでしたが……。梅若丸よ、今一度だけ、声を聞かせておくれ。」

しかし、梅若丸の姿を見ることはできません。

この様子を見た人々は、塚のそばに、花御前が生活できる小さな庵を建てました。そこで花御前は名前も妙亀とあらため、梅若丸の菩提を弔う（亡くなった後の幸せを祈る）ことにしました。

（梅若丸に会いたい、声を聞きたい。）と思いながら朝に晩に一心に念仏をとなえ続けます。妙亀の梅若丸への思いはつのるばかりでした。

ある日のことです。妙亀はいつものように朝の念仏を終え、梅若丸のことを思いながら隅田川の近くにある池のほとりまでやってきました。そこでは、都鳥がなかよく遊ぶ姿が見られました。その様子を見ているうちに、妙亀のほおを涙がとめどなくつたわって流れ落ちてきました。妙亀は梅若丸が息を引き取るときに残した歌を思い、自分でも、

くみしりてあわれとおもえ都鳥
子に捨てられし母の心を

という歌を詠みました。

すると突然、池に梅若丸の姿が現れたように見えました。妙亀はかわいいわが子に会えた喜びのあまり、我を忘れて走り出しました。梅若丸も母の方にかけよったかのように見えました。しかし、梅若丸の姿は、そのままふっと消えてしまいました。妙亀は梅若丸をしっかり抱くようにして池に身を投げてしまいました。池には、波紋だけが静かに広がりました。

それから池には、何ごとも起こらなかったかのように、都鳥が仲よく飛びかっていたということです。

梅若塚は現在、春日部市内の新方袋の満蔵寺という寺院の境内に石碑として残されています。親を慕う子、子を思う母、そして、二人を温かく見守り、いつくしんだ里の人々の優しさに包まれて……。